

2010年5月19日、荒川修作が亡くなった。

しばらくすると次々に新聞社から取材の電話が入り、詳しい事情も掴めないまま慌しく対応に追われた。世界的に活躍する現代美術家・荒川修作を郷土出身の重要作家の一人と位置づけて、その代表作品を系統的に収集して、調査・研究を続けてきた名古屋市美術館の学芸員として、その芸術の価値や意義、世界の美術界での位置や評価、その死がもたらす影響や意味、さらにはその人柄やエピソードなどについて、矢継ぎ早の質問にできる限り対応した。

荒川修作は本当に亡くなったのか。

その日の午後開催した記念イベント「荒川修作氏に質問する」のなかでも、2時間以上に渡って、まったく疲れを見せることなく、私たちが「解説」できなかったことについての「質問」に丁寧に答えてくれた。終了後には、サイン会まで開かれて、たくさんの来館者と会話を交わしながら、著書や展覧会カタログに「天命反転」を実現するための多彩な言葉を書き記していた。

荒川修作は亡くなっていないのかもしれない。

A man with dark hair, wearing a dark long-sleeved shirt, stands behind a wooden podium with a microphone, addressing an audience. To his left is a large white poster for an exhibition. The poster features the title '「荒川修作を」 解説する展' (Exhibition Analyzing the Art of Arakawa Shusaku) in large characters, with 'ANALYZING THE ART OF ARAKAWA SHUSAKU' in English below it. The dates '2005年3月19日[土] - 5月8日[日]' are printed. A list of sponsors follows: ●主 催=名古屋市美術館、読売新聞社; ●特別協力=岐阜県美術館、養老天命反転地、株式会社ABRF; ●後 援=愛知県・岐阜県・三重県各教育委員会、名古屋市交通局. A small sign on the wall behind him reads '講堂' (Auditorium). A red ribbon is visible on the far left edge of the frame.

開会式で挨拶する荒川修作氏(2005年3月18日)

日、東京事務所のスタッフから美術館に電話が掛かってきた。「荒川さんに展覧会の相談に来て、5分でOKを貰った人を初めて見ました」と、荒川さんの積極的な対応ぶりに驚かされたことを率直に教えてくれた。

荒川修作は生きているのかもしれない。

アートの旅「過去・現在・未来」

石黒 鏑二 (彫刻家・元名古屋市美術館参与)

彫刻・その発表形式の変遷 その3
アートに見る「新しい波」

2008年横浜トリエンナーレでも話題を提供した、中谷芙二子氏の「霧の彫刻」とのはじめての出会いには70年大阪万博であった。直径50メートル、高さ23メートルのペプシ館を、霧ですっぽりと包み込んだ作品は、猛暑という環境も手伝い、われわれに大変な心地よさと驚きを与えた。

現在では、農業や工業などの様々な分野で、世界各地で活用されている自然と同じような霧を、屋外で人工的に大量発生させる微細霧ノズルの開発は大変であった。その時、彼女のために協力したのは、アメリカの雲物理学者のトーマス・ミーであった。

その後、オーストラリアのシドニー・ビエンナーレをはじめ、川治温泉でのビル・ヴィオラとの共演によるもの、パリのラ・ヴィレットにある水の庭、立川市の昭和記念公園こどもの森など、この「霧の彫刻」は、国内外を舞台に大規模に活躍した。

通常われわれは、その場の気・風・気温などの微気象を見ることはできない。四季の中で呼吸する地表にどっぷりと浸かりながら、それらを見る能力はないのである。せいぜい自らの身体的触覚機能と草花の変化を見てそれを感じているに過ぎない。この「霧の彫刻」は、人工的に霧を発生させることにより、これらの不可視の大気現象を視覚化させたはじめての彫刻と呼んでいい。自然と人工が応答し融合する未体験の領域を提供したのである。

写真の発明から百数十年が経過し、映画、テレビ、コンピュータというメディアが相次いで誕生した「映像の時代」は、なお拡大し衰えを知らない。映像作家の飯村隆彦氏は、「ポストモダンへ向かう電子芸術」という活動の報告書で、エレクトロニック・アートには、2次元の絵画やグラフィックス、3次元の彫刻や建築、さらに音楽や映像を含めた幅広い領域があり、最近ではバーチャル・リアリティ(仮想現実)にも関心を持っていると語る。

このデジタル化が日常化する時代の中で、この「新しい波」を代表するお二人の動きが、われわれのアイデンティティや発表形式に、いろいろな示唆を与えてくれる。

つもない数字が、ニュースへの関心を一層高めました。この美術館を過去に何度も訪れたことのある筆者としては、金額の高さよりも、「あの美術館で！」という驚きの方が先に立ったのですが、昨今このようなニュースが頻繁に海外から聞こえてきます。日本でも神社仏閣から美術品が盗まれたというニュースは時折耳にしますが、幸いにして美術館が被害にあった例はほとんどないようです。年々物騒になる日本の社会ですが、欧米に比べればまだまだ治安がよいとも言えますし、新しい美術館が多い日本では、欧米の歴史のある美術館よりも建物の安全設計が進んでいるとも言

えるでしょう。今回の場合、夜間に窓ガラスを割って館内に侵入したようですが、当館の場合、外に面したガラスを割っただけでは展示室内に絶対に侵入できない構造になっています。それにしても、これほど欧米で美術品の盗難が多いのは、当然その市場価値が極めて高いからに他なりません。世界全体の経済がこれほど不安定なのにもかかわらず、美術品の価値が上がり続けているのは、通貨や債権の信用が下落している反動といえるでしょう。すなわちお金持ちの人々にとって、優れた美術品は数少ない安定した投機対象なのです。そしてそれは泥棒にとっても魅力的な獲

物になります。頻発する著名な美術品盗難の背後には、それを売りさばく巨大な地下市場の存在がささやかれています、どうやらそれはミステリーまがいのうわさ話のレベルではなさそうです。国際的な犯罪を防止する警察組織インターポールのデータベースには、3万点を超える盗難美術品の情報が蓄積されているということですが、これは広く情報を提供することによって発見を促すのと、知らぬ間に盗品を入手してしまうことを避けることを目的としています。同組織のホームページを通じて見るができますので、一度覗いてみてはいかがでしょうか。(F)

時の話題

「美術館でまたもや盗難！」

5月20日、パリの中心部にある市立近代美術館で、ピカソやマチスははじめとする作品5点が盗難にあったとのニュースがインターネット等で伝えられました。盗まれた5点は、いずれも質の高い作品ばかり。かなり目の肥えた泥棒による計画的な犯罪と推測されますが、被害総額110億円相当というとして



「荒川修作を解説する」展の会場

裏返すと、そこにショウ・ケースの図面を描いて、「なぜだか、わかるかね」と、あの独特の低音が響く声で問い掛けられた。私が戸惑っていると、「値段は同じだよ」と追い討ちを掛けられて…。私がおずおずと「作ったときが違うのでは…」と答えると、「そうなんだよ。近所の町衆の常連さんには出来立ての饅頭を渡すんだよ」と、大きな声で笑って、ショウ・ケースの図面をペンで指しながら、いくつか→(矢印)まで描き加えて、饅頭は作った順番にだんだん下段に降りていくと言うのである。

いまから思うと、なぜ、こんな他愛もない話になったのかも覚えていないけれど、この話を鮮明に覚えているのは、京都人の「いけず」な話が面白かったからでは決してなく、荒川さんの会話の進め方がとても印象的だったからである。すなわち、話し言葉だけでなく、実際に紙の上に図面を描いて、相手に対して視覚的にもわかりやすく順序立てて説明しようとするという荒川さんの仕草が、とても自然で、いつも遣り慣れている感じがしたのである。荒

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示 6

前々回から作品の点検の際の問題についてご紹介しています。事前の記録には存在しない、新たな傷が作品に見つかった場合どうするのか？ その傷が、本当に借用前には存在しなかった新しい傷なのか？あるいは最初からあった古い傷なのに、点検の際に見逃しただけなのか？この難問に解答、とまでいかずとも一つの方向性を与えてくれるのが修復家の存在です。一つの展覧会を組織するためには、美術館の学芸員はもちろんのこと、共催する新聞社やテレビ局の事業部員、運送・展示を担当する専門業者、ディスプレイ業者、ポスターやチラシを作る印刷業者、そしてカタログ制作会社など、数多くのスタッフの力が必要とされますが、そのスタッフの一人に修復家があります。修復家は、美術品にとってのお医者さんのような役割を果たす存在で、美術品の状態(病状)を正確に把握して、その状態に相応しい対処方法(治療法)を施すのが主な仕事です。通常、修復家はそれぞれにアトリエを構えて、様々な美術館や個人コレクターなどから持ち込まれる美術品のトラブルに対処していますが、展覧会の際には主催者から依頼を受けて、展示撤収の際の作品の状態確認などを行うことがあります。お医者さんにとっての往診のようなものと言えるでしょうか。作品に責任を持ち、状態確認を行うのは学芸員の仕事では、

展覧会 現在進行形

没後120年 ゴッホ展

2011年2月22日～4月10日、開催予定

今から14年前の1996年、当館では最初のゴッホ展を開催しています。ゴッホの二大コレクションといわれるオランダのクレラー＝ミュラー美術館の所蔵品による「ゴッホ展」がそれで、僅か1ヶ月の会期に27万人近い来観

川さんが何気なく描いた三段のショウ・ケースの図面は、とても簡潔に格子状の直線で3段に分割され、そこに幾何学的に記号化された山盛りの饅頭が乗った大皿が描かれて、それぞれの位置関係や配列状態が表示されていた。そして、その図面の上に、運動や移行を意味する矢印まで後から描き加えて…。そのときは気づかなかったけれど、いま考えると、これは紛れもなく、荒川修作の図式絵画の原初的な形態であることが理解できる。あの企画書の裏面に描かれたショウ・ケースの図面は、おそらくゴミ箱に丸めて捨てられてしまったことだろう。もし、あのとき気づいていれば、こっそり鞆に入れて持ち帰って、この追悼文の参考図版に掲載できたのに…。まさに後悔先に立たず。

荒川修作は確かにいまも生きている。

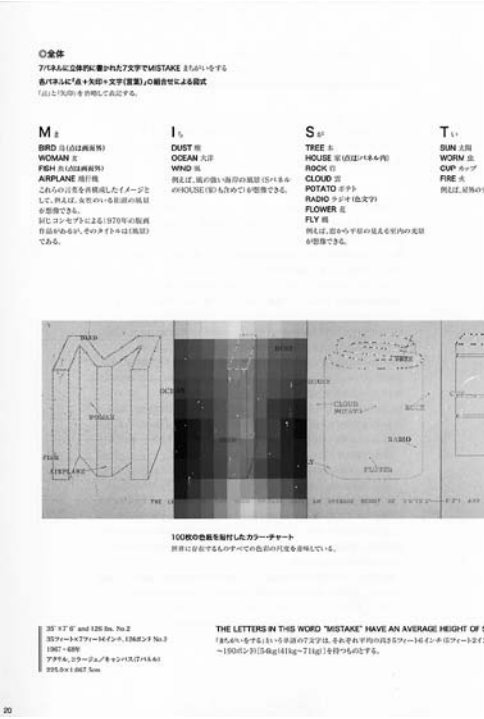
実際に、私が荒川さんとの会話で直接的に聞いたのは、こんな笑話のような思い出話だけだった。荒川さんの芸術論についても、

とお考えの方もいらっしゃるかもしれません。確かに、作品の所有者のもとに出かけていき、双方で状態を確認の上で記録を取り、作品を借用してくるのはほとんどの場合学芸員の仕事になります。しかし、筆者も含む学芸員の大半は、美術品や作者に関する知識は豊富に持っていたとしても、絵の具の成分や経年変化、キャンヴァスや絹布の劣化状態などといった科学的知識についてはほとんど持ち合わせていないのが実状です。ですから、例えば絵画の点検を行って表面に傷があるのを発見しても、それが新しいものか古いものかを判断できたとしても、何故その傷が生じて、どのような対処をすればよいのかといった具体的な方策を講じることはまずできません。そこで登場するのが修復家です。様々な借り主のもとから集められ、美術館の展示室に運び込まれた作品を、一点一点改めて入念に点検して、その状態をレポートに記録していくのが修復家の仕事となります。借用の際に見逃されていた傷が新たに発見されるのはこんな時です。借用の際の点検は、時間が限られていたり、個人のお宅などの場合、照明設備が不十分だったりすることもあり、往々にして幾つかの傷が見逃されることがありますが、修復家の目による入念な点検がそれを防いでくれます。新たな傷の発見か？と学芸員であれば緊張するところを、修復家は豊富な経験と知識により、その傷の発生の原因や時期などを的確に、かつ強い説得力で分析してくれます。そして大半の場合、それは見落としがもたらした「発見」であり、作品の状態に本質的な変化はないことを教えてくれるのが修復家なのです。(F)

者をお迎えした記録的な展覧会でした。それから14年を経て開催される今回のゴッホ展は、画家の没後120年を記念して、クレラー＝ミュラー美術館とゴッホ美術館という二大コレクションの作品を中心に構成されるものです。サブタイトルは「こうして彼はゴッホになった」。すなわち、画家を志してから僅か10年という短い期間に、ゴッホがあの特徴的な作風をいかにして作り上げていったのか、その軌跡を検証しようとするものです。その悲劇的な生涯と圧倒的に独創的な作風ゆえに、しばしば孤高の天才と称されるゴッホで

世界観についても、美術館学芸員ならば本来聞いておくべき専門的な話を聞くことができなかった(のは、そのとき私的的確な質問をするだけの知識も理解も持ち合わせていなかったからである)。しかし、その後、私は「荒川修作を解説する」展のために、岐阜県美術館と養老天命反転地に勤務していた二人の美術館学芸員と、ほぼ毎月1回(6時間)、研究対象となる荒川作品(1点)について徹底的に検討する荒川修作研究会(私たちの通称では荒研)を3年間に渡って30回以上開いて、荒川作品の「解説」に取り組むなかで、作品を通して荒川さんから間接的に聞くことができた話は膨大な質量になったと確信している。荒川作品のなかには、荒川修作が徹底的に考え抜いたことが、鑑賞者にできる限り正確に伝わるように、図式や記号、文字などを駆使して、美しく表現されているのである。思いつきや偶然による表現は画面のなかにまったくない。すべてが荒川さんの明解なメッセージなのである。

このときの展覧会カタログは、荒川さん自身が3日間持ち歩いて熟読してくれた(と東京事務所のスタッフから聞いた)ことが、私たちの「解説」の成果を証明してくれていると思っている。また、展覧会の開会式の挨拶の



「荒川修作を解説する」展のカタログ

感想ノートから

「コレクションを極める」

2月から3月にかけて開催した「コレクションを極める」は、名古屋市美術館の所蔵品を常設展とは違った視点で紹介して、その面白さをお伝えしようとした展覧会でした。感想ノートにも多くの言葉が寄せられました。最近はこのノートもかなり国際的になり、英語の他に、フランス語、イタリア語、ポルトガル語などの感想も記されていました。その中に、今時キャプションや解説文が一部しか英訳されていないのは、けしからんとのお叱りの言葉がありました。確かに感想ノートを見るまでもなく、最近美術館を訪れる外国の方がかなり増えており、バイリンガル表記を真剣に検討すべき時期に来ていると感じています。さて、今回の感想ノートの大部分を占めたのは、作品解説に関するものでした。今回の展示では全ての作品に300字程度の解説を付けたのですが、客観的なデータの記述を中心とする通常の解説とは異なり、作品の

すが、実は彼はたぐいまれなる努力の人でもありました。彼の作品の中には、過去の巨匠たちから同時代の前衛作家、大衆的な雑誌の挿絵から日本の浮世絵にいたるまで、ありとあらゆる要素が渾然一体となって存在しており、食欲なまでの好奇心と必死の努力の跡をそこに見ることができます。そのため初期の作品には折衷的と呼びたくなるような表現が往々にして見られますが、やがてそれは誰にも真似することのできない、自らの生命を燃やし尽くすようなあの独特の様式へと収斂していきます。ゴッホの作品が今なお我々を揺

なかでも、「とても良い仕事をしてくれた」とお褒めの言葉を貰ったことは、いささか自慢したい思い出である。

荒川修作は、初期の「棺桶作品」と言われる生命体のオブジェ作品から、視覚を通して鑑賞者に伝達する図式絵画を経て、人間の身体感覚を直接刺激する建築的な作品に到るまで、その総合的な芸術活動を通して、本気で真剣に人間を変革しようと考えていた。誰もがいつか必ず死ぬという「天命」を「脳」で諦めて生きている人間の精神を、直接的に「身体」への働きかけを通して、「死ぬことは間違っている」ことを実感して、「天命」を「反転」させて、生き生きと生きる人間へと変革するために、その生涯を掛けて取り組んできたのである。この地球という星の大地(地面)の上に立って、つねに重力の影響の下に生きている人間、すなわち私たち一人ひとりが変わることを望んでいたのである。そして、すべての人が変わり得ることを信じていたのである。

荒川修作は生物学的には死んだけれども、作品のなかには、確かにいまも生きている。2010年5月19日、荒川さんには「天命反転は起った」けれども、これから重要なことは、私たち一人ひとりが「天命反転を起すことができるか」ということである。(sy)



「荒川修作を解説する」展のカタログ

見所を掘り下げる、主観的な解説にあえて踏み込みました。この解説はおおむね好評をいただき、「作品の解説がイメージをふくらませてくれて楽しかったです」とか「解説により深く見られ、絵画に“参加”できた気がします」、あるいは「難しい専門用語が沢山書かれているより、今回のような解説は作品を見る、楽しむためのヒントが書かれていて素晴らしいと思いました」などなど、嬉しい感想を沢山ちょうだいしました。もちろん、一方では主観的な解説に対して「押しつけがましく、一方的な個人的見解を堂々と述べているあたりが、かなり不愉快だった」という厳しいお言葉もありましたし、「素敵な文章です」と評価していただきながら「丁寧すぎて見る方が考える余地がありません」というご指摘もありました。あえて実験的な試みを行った今回の作品解説。一部ご批判いただきましたが、充分な手応えもありました。美術館の役割は、何といっても作品と鑑賞者との橋渡しであり、作品の素晴らしさ、面白さをどれだけ伝えることができるかが、評価の基準になるものと考えています。解説に限らず、従来の枠に捕らわれない実験的な試みを今後とも重ねていきたいと思います。(F)

さぶり続けるのは、造形上の強い表現力もさることながら、存在の全てを賭けた彼の熱い思いがそこに深く刻印されているからに他なりません。ゴッホの作品を見るということは、120年の時を超えてゴッホその人と対峙することなのです。今回の展覧会では《アルルの寝室》や《種まく人》、《アイリス》といったこの画家の代表作の数々を堪能するだけでなく、最新の科学研究の成果や、アルルの寝室の実物大再現といった多面的なアプローチにより、孤高の天才画家の創造の根源に迫ります。(F)

どこが面白い？！

今回のテーマは、名古屋と知多にゆかりのある日本画家、嶋谷自然が描いた《湖心》(1978年)です。2010年1月9日ー2010年3月28日の展示期間にお寄せいただいた皆様のご意見を紹介します。

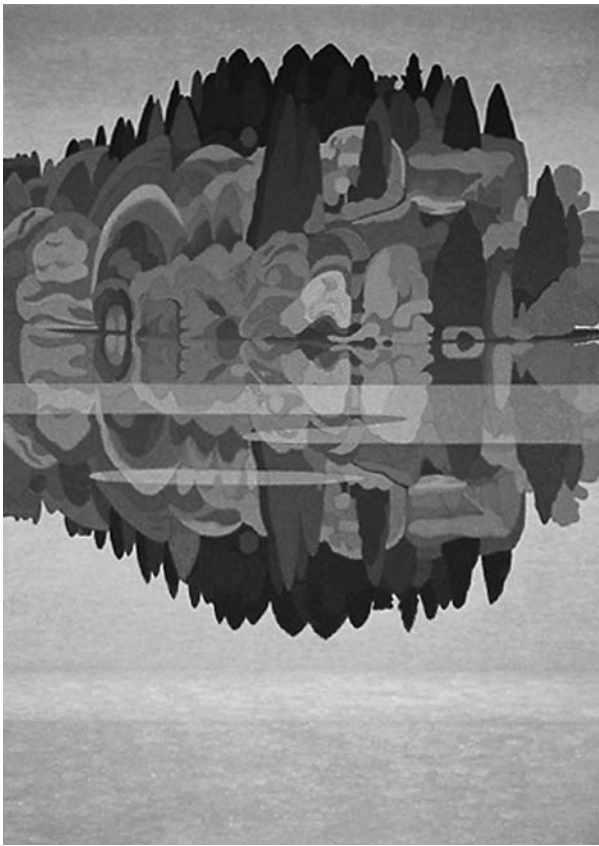
「この絵はしみたいでいろんな色がつかってあってすごいです。なんだかたのしくてふしぎな絵だな」(ゆうたさん 8歳)

「鏡に写ったようなまかふしぎの絵でグラデがとてもキレイで、心が落ち着きます、一見、上下対称のようにみえますが、少し違ったところがあるのでぜひ探してみてください〜い!!目をこらしてみればわかります!」(ひかるさん 13歳)

「なんてきれいな色なんだろう。この画家さん(嶋谷自然)の絵を一度みてみたいと思っていました。今日はとても幸せな気分です。今までこの美術館の常設展に何度も来ていましたが、であったのははじめて!!です。心が晴れないとき、この絵を見れば、何とかなるよ…ガッカリしないで…こんなにも自然界の色はきれいなんだし…と思えますよね。」(マーシャさん 60代)

「嶋谷さんの絵、日展で鑑賞していらい、なつかしい感じがする。じ〜と見ていると映画の世界"もののけ姫"のような画風。何か楽しげな絵です。」(?さん ？歳)

「陸と水の区別がしっかりとできていて近くでみると水との境界が分かるけど遠くから見ると水と陸がつながって見えてとても不思議



嶋谷自然 《湖心》1978年

議。陸の空と水に映った空を見ると陸の空が暗い感じで水の空が明るい感じがする。」(風音さん ？歳)

「ロールシャッパ(?)のテストを思い出すような絵ですね。人か動物か怪物が見えるような…住んでいるような…上下が同じ丸い島全体が空中に浮いているようにも見えます。」(里さん 52歳)

「動物が隠されているのですか。」(あっすんさん 13歳)

「横向きに見ると生き物にも見える!緑と青で目にやさしい。湖に雲もうつつている。上半分の空は暗くて下半分の湖にうつった空は明るい。」(たけしさん 14歳)

「湖心という題名から人の心の裏、表を表す作品なのではないかと思った。上下対称の絵でもある。」(T.Iさん 13歳)

「人の心の中の様 まるで時間が経った心が水平の下で美化され洗練されている様だ。本当の時の流は短いが真理の底では長い旅をしている気がした。」(敦さん 40歳)

「この絵を見ていて最初は他の方の意見の様に人の顔のように見えたり、間違い探しをしている様な感覚になっていたのですが、この絵のタイトルを見て、率直に湖が自身に映るありのままのを映し出す心というか、存在というものであることについて描かれたのではないかという考えを持つことができました。ちせつな文章ですみません > <」(ユキジさん 18歳)

「私には“脳みそ”にも見えます。心を表すような人間の芯の部分というか…。水面が透明すぎて、緑の物体の底まで見えているのか、反射しているのか、宙に浮いているのか…。四方八方から眺めたい作品だなあって思いました!!不思議だからこそ十人十色の価値観で楽しめるのだと感じました☺」(マルさん 25歳)

「ちょっぴり重たい気分でしたが、この絵に接し不思議な浮遊感…おかげさまで少し晴れやかになりました!!」(?さん ？歳)

《湖心》を間近でご覧になった方は、とても粒子の粗い岩絵具(緑青)が、この美しい色彩を作り出していることに気づかれたと思います(白黒の画像では伝わらないのが残念ですが…)。形も色調も非常に柔らかで、日本的な美意識を感じさせる画風に魅せられた方も多いことでしょう。「風景に向かい、その雰囲気没入してひたすら写生していると、雑念が払われるように風景からも余分なものが消えて、結果的には省略化された簡潔な風景画へと昇華される」と話す嶋谷自然は、64年にわたってもっぱら風景画を描き続けました。《湖心》は長野県野尻湖の弁天島がモチーフになっているそうです。この作品は、1979年の第11回改組日展で文部大臣賞を受賞しています。(nori)

美術館Q&A

どうして“フランク・ステラ「せっきょう」”は、とびでているだけなのに、「せっきょう」っていう題名? どうして?

フランク・ステラの《説教》は当館の常設展ではお馴染みの作品ですが、そのタイトルについて疑問を抱かれる方は多いのではないのでしょうか。一見抽象的で、なんの物語性も感じられない作品ですが、ステラは、実はこの作品のタイトルを、アメリカの作家メルヴィルの『白鯨』という小説から採っています。『白鯨』は、捕鯨船ピークォド号の船長であるエイハブと、彼の片足を食いちぎった白鯨モービアー・ディックとの対決を描いたもので、

実に135章から成る長編小説です。135章に「語源」、「文献抄」、「エピソード」を加えた138の部分から構成されているのですが、ステラはこの138の部分全てを作品化することになりました。作品のそれぞれに、各章のタイトルを付すことにしたのです。

そもそも作品の中に鯨というものを取り入れようとしたのは、息子といっしょに訪れた水族館で、ゆったりと泳ぐ鯨を見たことによるそうです。そこからステラは、少年時代に読んだ小説『白鯨』を思い出し、再度読み出したのです。読めば読むほど、その各章のタイトルを作品に使うことを素晴らしいと感じたステラは、〈白鯨シリーズ〉または〈波シリーズ〉と呼ばれる266点にものぼるシリーズを作り出しました。彼はそのために12年の歳月をかけたということです。

「説教」は、小説『白鯨』の第9章のタイトル

です。教会での神父の説教を題材にしたこの章の内容は、しかし、作品の造形的な面には何も反映されていないように見えます。ステラはなぜ、このような抽象的な作品に、物語のタイトルを付けているのでしょうか?

ステラの初期作品は、もっとミニマルなものでした。この作品のように壁から飛び出してもいないし、うねりや動きを感じさせるものでもなく、最小限の要素によって表現しようとした絵画だったのです。そういった作品が徐々に変化し、抽象絵画の新たな可能性を模索しながら、やがて《説教》のような作品が生まれて来ました。感情的なものを極力排した画面から、賑やかで動きがあり、感情的ともいえる画面へと変化したのです。このようなステラの制作の方向性と、タイトルに見られる具体的な表現には、何か関連があるのかもしれません。

単に壁から飛び出している抽象的な作品に何故《説教》というタイトルが付いているのか、という疑問は、ステラの作品の核心に迫る疑問ではないかと思います。それは、抽象絵画とは何であるのかということを考えさせるものでもあります。すぐに答えは出なくとも、考えてみるのは面白いことなのではないでしょうか。そして、矛盾するようですが、ステラのこの作品はまた、何も考えずに純粋に色や形を楽しむのにとっても良い作品でもあるのです。ダイナミックなうねりや動き、色彩の鮮やかな取り合わせを楽しんでいただければと思います。ステラの作り出した抽象の世界、どうぞ心ゆくまで楽しんでみてください。(akko)

*ご質問をとりあげさせていただいたU.Y.さんには、「ポーラ美術館コレクション展ー印象派とエコール・ド・パリ」の招待券2枚をお送りさせていただきます。どうもありがとうございました。

郷土の作家たち

松岡映丘(1881-1938)と**服部有恒**(1890-1957)
一**名古屋市庁貴賓室壁画『織豊両公対作』**

名古屋市は、1933(昭和8)年10月に完成したばかりの市庁舎貴賓室に掲げる絵画作品の制作を日本画家・松岡映丘(1881ー1938)に依頼する。民俗学者の柳田国男を実兄にもち、10代半ばより本格的な大和絵の道に進んだ映丘は、歴史風俗の考証を重ね、平安時代に成立した大和絵に於ける風景画の世界を近代日本画のなかに再生させた。前年1932(昭和7)年の第13回帝展に《右大臣実朝》を出品し、近代に於ける“歴史画”のジャンルを確立、その第一人者としての地位をゆるぎないものにした映丘は、名古屋市が依頼するに格好の人物であった。

《安土山上の信長》は、そうした映丘の志向を如実に示すものでもある。

「癪癪らしいその人の風格を表はして、あるひらめきを見せている。しかし全体が温和な様式に統制されて表現の割に左方の松の木などは写実にすぎて些か調子が破られたようである。」「大和絵の伝統と写実との調和に苦心の跡が見られ、殊に古実の調べの周到さは十分



松岡映丘 《安土山上の信長》1934(昭和9)年

に汲める。人物と背景の調和にはまだ多少研究の余地が残されて居るやうに見受けられる。」《安土山上の信長》には、手厳しいが的確な指摘が寄せられたが、だがそれでもなお、「映丘氏の作品は、美人画や風景でない限り、帝展には、なくてはならないのだ。」という支持を受け、さらには「日本國史畫の重要生命点だ。」とまで評価された。そうした映丘には、早くからこの地方からも師事を仰ぐ作家が相次いで現れた。例えば、林雲鳳(1899ー1969)は、映丘に学ぶべく東京に居を移し、帝展入選を重ね、《安土山上の信長》が発表された第15回帝展には《松の下露図》(当館所蔵)を出品している。また、名古屋出身の日本画家・服部有恒(1890ー1957)は、東京美術学校の先輩でもある映丘に師事し、終生「最も忠実な映丘の



服部有恒 《東征出陣の秀吉》1934(昭和9)年

古典主義の踏襲者」とまで評された。

さて、その経緯と詳細、さらに出品歴については不詳であるものの、師・映丘の《安土山上の信長》に合わせて、服部有恒の作品《東征出陣の秀吉》も、名古屋市からの依頼に応じて制作されたものである。師・映丘の「信長」が、琵琶湖を眼下に望む山上で描かれているのに対して、弟子・有恒の「秀吉」は、陣幕のなかに於かれ、「信長」に対面しながら、一段下に言わば一歩下がるかのように配される。さらに眼下に見える琵琶湖の汀に呼応し、つながらんかのように陣幕の裾は描かれる。仕える従者の手に鷹と新武器である鉄砲を描くことによって映丘が、「信長」の得意と好尚を象徴したのに対して、有恒は陣幕と「秀吉」の鎧姿、それに従者が曳く軍馬を飾り、師の大和

絵の風景描写に対応し、思い切った装飾的处理で対照させて見せる。師・映丘の画風から脱却すべく模索が続けていた有恒は以後、線描と明るい色彩に独自性を見出して行った。

この二点が制作された翌1935(昭和10)年、松田文相による「帝展改組」にあたって、松岡映丘は東京美術学校日本画科教授の職を辞し、<国画院>を結成し、その創立に「我が民族精神の精華たる古典の素養に基きて時代に更生し、新興芸術文化の為に奉仕したい」という趣旨を掲げている。有恒は師・映丘について、「その理想は極めて高速でその教義は非常に広汎なものである。つまり大きな意味での國畫運動を提唱せられたのであるが、中に就きて歴史画に於ては常に第一義歴史画の絶対的な存在を高唱された。」と絶対の信頼を寄せていた。だが、映丘が推進した新興大和絵は日本画の洋風化と揶揄され、また彼等が信奉した歴史画は、やがて時代の趨勢のなかで美談や訓示等、別趣の意味や役割を担わされて行くことになる。

余計な事かも知れないが、この二点の作品を購入するに当たり、名古屋市は寄附金を募集、利息を含めたその総額は三千六拾壹圓に及んだ。その報償として映丘には二千元、有恒にはその半額の壹千圓が支払われた。それにしても、どうして名古屋はこんなにも“織豊”が好きなのだろうか?(J.T.)

展評 2010年5月1日(土)～5月31日(月)
伊豆高原

第18回伊豆高原アートフェスティバル

伊豆高原アートフェスティバルに行ってきました。毎年5月に開かれるこのフェスティバルは、伊豆高原に暮らす人々が主に自宅を開放して様々な作品を展示しているもので、美術館で作品を観るのとはまた違った気楽な雰囲気を楽しめる。出かけた日は雨模様で、高原へと向かう道は濃い霧に包まれ、休火山の大室山の綺麗なかたちも全く見えなかったが、翌日になると嘘のように青空が広がり、清々しい5月の新緑が目には眩しかった。最初にこのフェスティバルを主催する谷川晃一さんの「南庭工房」を訪ねると、飄々とした谷川さんが現れて、亡くなられた奥様の宮迫千鶴さんにご自分の作品について説明してくださった。明るく楽しげな作品の数々に心が和む。次に、谷川さんのところからほど近い田島征三さんのお宅を訪問。絵具の跡からアトリエとして使われていたことがわかる部屋に、田島さんは木の実を使った作品を展示していた。木の実が不思議なアートに変化して、なんだか気のようなものを発しているみたいだった。田島さんのアトリエを後にして、池田20世紀美術館に向かった。企画展として名古屋の画家、稲垣孝二さんの作品がずらりと並び、

圧巻であった。二日目には何人かの作家の作品を展示しているお宅に伺い、安土忠久さんの味のあるグラスなどを見せていただく。また、オールドノリタケのコレクターのお宅で、凄く古いノリタケの食器を見せていただいた。ここでは、奥さんが丁寧に説明してくださった。他にも幾つかの展示を見て、お菓子屋さんで可愛いうさぎのお菓子を買って、帰路についた。

ごく普通のお宅をギャラリーのように解放して展示をしているところが、このフェスティバルの魅力である。皆が主体的にアートに関わり楽しんでいることが感じられ、伊豆高原の美しい自然の中で豊かな時間を過ごすことができた。アートというものの多様な在り方を知り、アートが私たちにとって身近なものとなるために、こういった試みは貴重なものだと感じた。(akko)



実らずに殺されてしまいます。やるせなく悲しい物語で、音楽は不気味な静寂で終わります。音楽だけでなく、文学も同様です。シェイクスピアの有名な戯曲「ハムレット」「オセロ」「マクベス」「リア王」はいずれも悲劇です。なぜ、悲劇と分かっているのに、お金を払って本を買って、映画を見、音楽を聴きにゆくのでしょうか。悲しい気持ちになりたいのでしょうか。美術だってそうです。美しくこころよいものだけに、引きつけられるのではありません。

藤原正彦が、読書について述べている印象的な部分を思い出しました。「一言で言うと、時空を越える愉しみである。知識を得る、感動を得る愉しみである。人間は知識を得たい動物である。脳はそうにできている。人間は感動したい生物である。脳がそうにできている。」(『決定版 この国のけじめ』文春文庫)。相当に極端な言い方ですが、本質的な点を突いているものではないでしょうか。

美味しい食べ物と魅力的な異性、これにドキドキするのは、生命を維持し、種を保存するための動物としての本能でしょう。しかし、人間はこれ以外にも「ドキドキ」します。小説を読んで行間に涙したり、17文字の俳句からはイメージが限りなく拡がります。「間(ま)が素敵」などと、歌舞伎で無音の部分に感動します。そして絵画、筆の軌跡である画面を見て、時空を越えて感動します。これらすべて、人間ならではのもののようです。人間が人間である証ともいえるものではないでしょうか。悲劇もおもしろいのです。(hhk)

館まで何十分待ちの行列を覚悟していましたが、意外にも、すんなりと会場に入れて、じっくりと若冲のユーモラスな水墨画(と濃厚な彩色画)の世界を堪能することができました。

昼食後には、次の訪問地である秋野不矩美術館へ。赤瀬川原平と路上観察学会でも活動した建築家・藤森照信の設計になる建物は、インドに滞在して制作活動を行った日本画家・秋野不矩の芸術に相応しく、インドの風土を感じさせる自然の素材を見事に生かしていました。とても小さな落ち着いた美術館なので、秋野不矩作品だけが展示されている時期にもう一度、親しい人たちと二、三人でゆっくりと訪れたいと思いました。(sy)



秋野不矩美術館で(2010年5月9日)

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

ストラヴィンスキー：バレエ音楽「ペトルーシュカ」

2010年7月16日(金)
セントラル愛知交響楽団第107回定期演奏会
愛知県芸術劇場コンサートホール

悲劇の音楽です。当日の演奏プログラムは、ムソルグスキーの交響詩「禿山の一夜」(原典版)と、ストラヴィンスキーのバレエ音楽「ペトルーシュカ」(1947年版)、それにリムスキー＝コルサコフの交響組曲「シェヘラザード」です。3曲ともオーケストレーションにすぐれた作曲家のもので、管楽器の出番も多く、聴き応えのある好演でした。ただ、ペトルーシュカにはオーケストラにピアノも加えられ、重要な役割を果たしているのですが、座席の場所が悪かったせいか、その効果が味わえなかったのが残念でした。

会場で思ったのは、シェヘラザードはともかく、前2曲は決して明るく快活とは言えない曲で、不気味な雰囲気や漂うものなのに、このような音楽を人はなぜ聴きに來るのかということです。ペトルーシュカ(ピョートルの愛称)は、おがくずの体を持つわら人形の物語で、命を吹き込まれて恋を知るのですが、

協力会通信

静岡県立美術館の
リニューアル・オープン記念展
「伊藤若冲―アナザー・ワールド―」

今年の協力会の春のツアーは、GWが終ったばかりの日曜日に催行されました。今回は久しぶりに東名高速道路を東へ、リニューアル・オープンの記念展「伊藤若冲―アナザー・ワールド―」を開催中の静岡県立美術館と天龍市(2005年に浜松市に合併編入)が1998年に開設した秋野不矩美術館を訪ねました。朝から五月晴れの好天に恵まれて、心配していた渋滞もなく、予定通り開館時間の10時に最初の訪問先の静岡県立美術館に到着しました。伊藤若冲は、江戸時代に活躍した奇想の画家で、2000年の京都国立博物館での没後200年の記念展以来、爆発的に人気が高まっています。2007年には京都の相国寺境内の承天閣美術館において「動植綵絵」展(全30幅を展示)が開催され、昨年の冬には、MIHO MUSEUMで「若冲ワンダーランド」展も開催されました。今回の展覧会は、それに続くもので、入

展評 2010年2月16日(火)～3月14日(日)
愛知県児童総合センター

小さい美術館

今年の8月21日(土)から10月31日(日)まで、国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2010」が開催されます。これにあわせて、教育普及事業のひとつとして、子どもに向けて『キッズトリエンナーレ』が開催されます。「小さい美術館」は、この『キッズトリエンナーレ』のプレイベントとして実施されました。

愛知県児童総合センターは、1996年の開館から、アートの持つ力に着目し、アートを子どもの成長に欠かすことのできない遊びと結びつけた活動を行っています。

センターに井垣理史、丹羽誠次郎、茂登山清文の三者が加わって実現された「小さい美術館」は、文字通りに小さい、白い立方体の空間に、1点の絵画を展示し、その場を一人ずつ体験するものでした。

この空間は、小さいながらも、慎重に考え抜かれており、その場の体験からは、企画者の良心が伝わってきました。見ようによっては、手抜きに間に合わせとも受け取られかねないほど、潔く無駄を排した空間には、企画者の覚悟のほどが仄見えるようでした。

「小さい美術館」は、いたるところに子どもの遊びを誘う仕掛けのあるセンターの建物のなかで、1階と2階をひっそりとつなぐ階段

イベントガイド

■特別展

あいちトリエンナーレ2010 国際美術展
会期：2010年8月21日(土)～10月31日(日)

「トリエンナーレ」は、3年ごとに開催する国際芸術祭です。初回となる今年の「あいちトリエンナーレ 2010」では、「都市の祝祭 Arts and Cities」をテーマに、世界最先端アーティストが集い、名古屋市美術館のほか、愛知芸術文化センター・長者町地区・納屋橋地区・中央広小路ビルなどを会場に、国際美術展始め、パフォーミング・アーツ(舞台公演)、オペラなどの多彩な催しが繰り広げられます。

名古屋市美術館会場での特別展「あいちトリエンナーレ2010 国際美術展」には、次の12組のアーティストが出演しています。

◆トム・フリードマン Tom Friedman
◆ジェラティン Gelitin
◆クー・ジュンガ Koo Jeong A
◆オー・インファン Inhwan Oh
◆ラクウェル・オーメラ Raquel Ormella
◆ジラユ・ルアンジャラス Jirayu Rengjaras
◆ホアン・スー・チエ Huang Shin Chieh
◆島袋道浩 Shimabuku
◆塩田千春 Chiharu Shiota
◆フランツ・ヴェスト Franz West
◆エクトール・サモラ Héctor Zamora
◆ツァイ・ミンリャン Tsai Ming Liang
国際美術展チケット：一 般(当日)1,800円
大 学 生(当日)1,300円
高 校 生(当日) 700円

※1枚のチケットで全ての会場の国際美術展に入場いただけます。(各会場、入場当日に限り再入場可。会場ごとに日を替えて入場可。)

※その他お得な団体割引チケット・フリーパスなどがあります。

※「あいちトリエンナーレ2010 国際美術展」のチケットで、当館の常設展もご観覧いただけます。「あいちトリエンナーレ」の詳細・お問い合わせは、あいちトリエンナーレ実行委員会事務局へ(愛知県芸術文化センター内 TEL052-971-6111) 公式http://aichitriennale.jp/

の踊り場に設けられており、子どもたちは遊びの探検のなかで巣箱のように宙吊りにされたこの場を発見し、空間を体験します。その体験は、鬼ごっこをしているあいだに知らない場所に出てしまったときに味わうような、日常とはどこか違う感覚をもたらすものです。子どもたちの多くは、そこでの体験を美術鑑賞とは思わず、何か不思議なものに出会った、あるいは何か不思議な体験をしたというように感じたことでしょう。

美術との出会いは、本来、釈然とはしない何かをもたらすものであり、その宙吊りの不安定さを糧として私たちは内省に向かいます。不思議を感じ、それは何かと考えた体験は、子どもたちが長じたとき、いつかどこかで思い出され、その人を豊かにするだろうという思いが、この企画を成り立たせているのでしょう。純粹に絵画と向きあう空間を作り出し、絵画を見るという行為のひとつの原点を子どもたちに体験させようとする試みは、人はなぜ美術や芸術を必要とし、それらを体験する行為へと向かうのかという問いかけも含んでいます。

この企画に良心を感じるのには、情報として美術を取り扱い、質と量を誇ることで、1つの作品にじっくりと向きあうことを難しくしている今日の展覧会のありように疑問を投げかけるからです。祝祭を演出するものとして芸術が扱われているように見受けられるトリエンナーレ本体への、問題提起でもあるのだらうと感じました。(み。)

■あいちトリエンナーレ2010 関連催事

○アーティスト・トーク

講師：オー・インファン(特別展「あいちトリエンナーレ2010 国際美術展」出展作家)
日時：10月3日(日)14時～
場所/定員/料金：講堂 先着180名 無料
○**パフォーマンス**「Everyone is An EARTHIST」(ナタリヤ・リボヴィッチ+藤田央)
日時：10月24日(日)13時30分～15時
場所/料金：名古屋市美術館サンクンガーデン 入場無料(雨天の場合は2階講堂)

■常設展

○**名品コレクション展Ⅱ(後期)**
会期：9月22日(水)～11月23日(火・祝)
エコール・ド・パリ：パリ 1910～30年代
メキシコ・ルネサンス：メキシコ・シティ 1930～50年代
現 代 の 美 術：ニューヨーク 1970～90年代
郷 土 の 美 術：東京 1950～70年代
○**名品コレクション展Ⅲ**
会期：12月4日(土)～4月10日(日)

■常設企画展「ぶろだくしょん我S」

1969年から1974年の間、名古屋を主な活動場所として旧来の枠組みを問い直す新しい美術表現を試みたグループ「ぶろだくしょん我S」の、前衛的な中でも異色であった活動を、残されていた作品と記録資料によって紹介。会期：12月4日(土)～2011年2月6日(日) 場所：常設展示室3

■コレクション解析学2010ー2011

学芸員が当館のコレクションから1点の作品をとりあげ、その魅力を紹介する講座です。場所：講堂 先着180名 無料
○**第3回 9月26日(日)14時～**
講師：保崎裕徳(名古屋市美術館学芸員)
作品：マルク・シャガール《聖書》1931ー39年／1952ー1956年(版画集刊行1957年)
演題：その古くても新しい魅力

※当館ホームページ(<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>)をご覧ください。10月18日(月)・10月25日(月)は、臨時開館。(A)

【編集後記】

今夏の猛暑のなか、あいちトリエンナーレという一大イベントが始まり、美術館内も連日熱気に包まれています。名古屋では、80年代あたりによくの現代美術の画廊やICA名古屋などの活動があり、「名古屋は現代美術のメッカ」という声も聞かれたほどでした。その後や現代美術熱は下火になっていたようですが、今回トリエンナーレが開催されることが、その名古屋にどのように影響するのでしょうか？名古屋市美術館もトリエンナーレの一会場となり、面白い作家を多数紹介しています。彼ら、彼女らの作品が、やや停滞気味？の名古屋に何か新しい風を吹き込むかもしれません。そして、トリエンナーレを観に来てくださる観客の皆さんも、名古屋の美術の新しいシーンを作っていく人々といえます。このアートペーパーを読んでくださっている皆さんも、ぜひトリエンナーレに足を運んで、ホットな名古屋を満喫していただきたいと思います。(akko)

アートペーパー第84号 発行日：2010年9月1日
発行 名古屋市美術館 [白川公園内]
<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日:毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)

 Nagoya City Art Museum